

教職大学院Newsletter 96

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻教職大学院Ne wsletter編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10250

教職大学院

Newsletter No. 96

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2017.4.14

福井大学教職大学院を訪問して

兵庫教育大学教職大学院授業実践開発コース教員一同

2017年2月5日、雨が降りしきる中、兵庫教育大学教職大学院授業実践開発コース（以下、兵教大授業実践コース）の教員9名で福井大学教職大学院（以下、福井大）を訪れた。長期実践報告会の見学と福井大のFD活動について聞き取り調査をさせていただけることになっていたからだ。かねてより、福井大学教職大学院の先進的な取り組みについて聞き及んでおり、我々の教育・研究に非常に参考になるものと目星をつけていた。伝手を頼って遠藤貴広先生にコンタクトをとったところ、幸いにも訪問調査について快諾していただき、加えて、両手を軽く超える関連論文を提示していただけた。せっかくの好機と、我々も事前に件の文献を読ませていただいた上でそれらについての意見交流会も行うなど訪問の準備にもつつい力が入った。その中で、我々の行っている実践とのいろいろな差が自覚され、是が非でもこの目や耳で確かめたいとの意欲を高めつつ、福井大の門をくぐったのであった。以下簡単に当日の流れを振り返った上で、我々9名の学びを綴ってみたい。

当日は、最初に、長期実践報告会の様子を見学させていただいた。長期実践報告会では、たくさんのテーブルが置かれ、それぞれのテーブルをぐるりと囲む形で4～5名ずつ院生さんや大学教員の先生方が座っていた。院生さんたちは、分厚い報告書を使いながら、自身の実践の省察を熱心に語り、他のメンバーはそれに聞き入っていた。互いにじっくり「語り合う」「聞き合う」関係性が構築されている様子がうかがわれ、こちらもつい聞き入ってしまった。その後、別室にて専攻長柳沢昌一先生および遠藤貴広先生から福井大でのFD活動についてお話をうかがった。最初に兵教大授業実践コースの教員から自己紹介および質問を行い、それに対して応答してもらおう形で、ショーソンの組織論、福井大におけ

る多様な立場の教員が混在する中での組織づくり、地域との連携体制の構築、発想の転換の重要性等々ここではまとめきれないほど多くのことを熱くお話いただいた。

この日の訪問が私たち兵教大授業実践コース教員に与えた刺激ははかりしれない。いわば軽いカルチャーショックであり、“ダブルループ”的な展開の契機になったとも言える。以下に、後日、兵教大授業実践コース教員で行った振り返り交流での感想を整理したい。そこで話の中心となったのは、福井大で学ばせていただいたことを活かして、それぞれ「大学院の立ち位置」「組織・体制」「カリキュラム」「文化」が大きく異なる兵教大授業実践コースにおいて、院生のために私たちは何ができるのかということであった。ここでの話を大きく3つにまとめてみたい。

1つめは、兵教大授業実践コースでは、院生同士が実習での実践を省察し、ゆっくり語り合う場はゼミに限られており、コース全体としてはほとんどそうした場がないということである。兵教大授業実践コースの中間発表会や最終発表会は、学会のような形式で行われる。そのため、他の院生の多くの発表を聞くことができる一方で、対話（共感や励まし）の場が公的な場に位置付けていない。そこで、この点については、早速、2017年度から教育実践課題解決研究という必修の授業でそうした時間を設定することにした。直近の取り組みとしては、新入院生

目次

- 巻頭言 (1)
- スタッフ・院生紹介 (2)
- 平成28年度教員免許状更新講習実施報告 (11)
- 開講式 (14)
- スケジュール・スタッフ一覧 (15～16)

と新2年次生と大学教員を混合したグループを作り、新2年次生が去年1年間の取り組みを振り返って語り、新入院生がそれを聞き対話する中で今後の見通しを持てるような時間をこの4月中に設定している。

2つめは、福井大のように長期的に実習を行いながら、省察や対話を重ねる中で、自身のテーマを見つけ、力量を形成していくスタイルは、特に学卒院生にとって資する点が多いのではないかとということである。兵教大授業実践コースでの院生の研究は、自身の設定した課題に即してゼミを選び、課題解決のための仮説を設定し、それを実習での実践の中で検証する形でのものがほとんどである。その場合、教職経験に乏しい学卒院生にとってはそもそも自分が解決すべき課題をなかなか見つけられない場合がある。実習の前に課題を設定し、仮説を立て、検証するという筋道をたどる研究のみに固執することなく、柔軟性を持つことが大切だろうということが確認された。

3つめは、現職院生と学卒院生との協働的学びをもっと自然に組織することが必要であるし、可能ではないかということである。兵教大授業実践コースでは2007年度の発足から2013年度まで、専門科目においては現職院生と学卒院生が同じ授業を受講する形態がとられていた。しかし、それぞれの経験や知識だけでなく、そもそもの到達目標（ミドルリーダーとスーパールーキー）が大きく異なっており、授業において様々な支障が自覚されるようにな

った。そのため2014年度から、いくつかの科目を現職院生向けの授業と学卒院生向けの授業に分ける一種のストーリーリングを導入した。その結果、確かに成果は上がったものの、一方で、現職院生と学卒院生との関わりが少なくなり、両者の学びの協働性が希薄になったことが問題点として浮上してきた。福井大の場合、現職院生と学卒院生がペアを組んで同じ学校で実習を行い、大学に戻って、現職院生・学卒院生の区別なくともに語り合うといった中でごく自然に協働的な学びが組織されていた。そうした姿を我がコースの院生に是非実現してもらいたいと願いを新たにされた次第である。

以上、大きく3つを述べたが、まだまだ議論の途上であり、今後の取り組みを一層検討していきたい。その際、表面的な模倣にならないよう、カンファレンスをいかにアカデミックにつないでいくか、いかにカンファレンスでの学びの質を担保するか、そのためにも学びの評価をいかに適切に行うか、いわゆる授業力とカンファレンスにもとづく学びとの関係性をどう考えるか、学校組織の課題と個人に関心にもとづく課題のバランスをどう考えるかなどの論点についても今後深めていきたい。

最後に、訪問前から多くの資料をお送り下さり、訪問時には懇切丁寧に長時間私たちの相手をしてくださった柳沢先生や遠藤先生をはじめ、長期実践報告会に参加されていた先生方、院生さんたちに兵教大授業実践コース教員一同心より感謝申し上げます。

スタッフ・院生 自己紹介

中島 健 なかじま たけし



この4月より着任いたしました中島健と申します。先月の3月末までは、松本市にあります長野県教育委員会中信教育事務所に勤務し、生活科・総合的な学習の時間や幼児教育、教職員研修等を担当しておりました。今回、信州を離れここ福井の地にお世話になることになり、転校をした児童生徒のように、正直なところ期待と不安でいっぱいです。しかし、思い返してみますと、以前、伊那市立伊那小学校に勤務していた当時は、福井

大学の学生の皆さんに伊那小学校の実践を紹介したり、ラウンドテーブルにも何度か参加させて頂いたりして、自らの実践を振り返る貴重な学びの機会を、この福井の地で与えて頂きました。

福井での新生活のスタートに当たり、今後の職務について考えていることを書き留めてみました。

現代は、知識基盤社会、生涯学習社会と言われていきます。そこに生き次代を担う子どもたちは、我々大人とはまた異なった人生が待っている、と予想されます。そんな子どもたちを育む教育は、これまでの我々が受けてきたような「知識や技能の伝達と習得を中

心とした学び」から「創造的な学び」へ転換することが求められていると思います。

一方、未来を創る子どもたちの教育を担う教師もまた、「何かを知っている人」であるだけでは不十分で、教育観や指導観などを転換することが求められています。生涯を通じて学ぶ力、洪水のようにやってくる大量の情報の中から、自ら主体的に必要な情報を選択できる力、予測不能な未来を切り開いていく力などを、子どもたちの中に育むことのできる高度な専門職、言い換えれば「学びの専門家」であることが求められていると考えられます。つまり、専門職としての教師自身が、知識や技能の伝達にとどまらない、創造的な学びを求めて実践し、学び続けなければ、次代を担う子どもたちの教育を実現することはできないと考えます。

しかし、指導主事として多くの小中学校を訪問し、数多くの授業を参観するなかで、創造的な学びを求める教師の意識変革は、必ずしも十分に浸透していないことを痛感しました。また、高い意識は持っていたとしても、具体的にどのように日々の多忙な学校生活のなかで、教師としての力を伸ばしていくのか、自分のキャリアステージに合わせて、どのように研修を積み重ねていけばよいのか、戸惑っている教師も多いのではないのでしょうか。

私自身のことを思い返してみますと、幸運にも初任校を皮切りに、その時々で自分の実践を記録し、広く校外の方にもその実践を公開して自らを振り返る機会を継続的に頂いてきました。また、勤務した各小中学校において、日々の授業についてその在り方を見直すような場を頂きました。子どもの意識を大切にされた教科教育の充実について、教師という職の重要さと共に学ぶ機会。白紙単元学習と称した総合学習や総合活動を学ぶ機会。中学校において、地域と共に育つ生徒の育成を目指した取り組みを学

ぶ機会等です。その度に、私は今までの自分の指導感や指導法を問い直さざるを得ない壁にぶつかり、そこからまた新に歩みだしたように思います。

ここ福井大学教職大学院は、大学院の職員が、院生である幼保こども園や小中高校等の教員の勤務校に出向いて指導する「学校拠点校方式」の実践が行われています。現職教員や、学校で長期のインターンシップに取り組む院生の指導を通じて、学校の教職員組織全体を、学び合う集団に変えていくような支援の方向は、まさに今の学校現場が必要としていることだと考えます。

また、県外から福井県を見たとき、全国学力・学習状況調査や全国体力・運動能力、運動習慣等調査において、例年好成绩を収めている本県の教育現場は大変魅力的です。本県への教育派遣による報告等からその一端を垣間見ると、「教員同士の同僚意識の高さ」や「当たり前ことの徹底」などが挙げられ、こうした福井らしさは「しなやかで高め合う協働」とも説明されています。ほとんどの小中学校で同じ価値観に基づいた指導が徹底され、学校間の格差が少ないことが、学力・体力トップクラスの要因であるとも述べられていました。

これらの成果は、福井県の教育現場を中心になって支えている福井大学及び教職大学院等の力が大きいと思われまます。教育行政にかかわった者として、教員養成の段階も含め、教員の資質向上のために、どのような継続的な取り組みを行っているのかについて是非共に学びたいと思っています。

私は、この地で児童生徒が学ぶということについての、具体の姿に基づいた教育研究を進めながら、教員の学びを支援するという決意のもと、児童生徒、そして教職員の笑顔あふれる学校現場を支えられるよう努めていきたいと思っています。宜しく願いいたします。



高阪 将人 こうさか まさと

4月1日付けで教職大学院の講師として着任いたしました高阪将人と申します。3月末までは国際協力機構(JICA)において、アフリカの教育セクターに携わり、各国における技術協力プロジェクトや国別・課題別研修、学校建設の案件形成、実施、評価を行ってしまし

た。全国から注目されている福井大学教職大学院にて、皆様と一緒に教育について考えることができ、大変嬉しく思います。これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

ここからは、パプアニューギニアとザンビアにおける教育・研究活動を述べ、自己紹介とさせていただきます。大学卒業後すぐに赴任したパプアニューギニアでは、現地教員として9年生と10年生(中学3年生と高校1年生)の数学と理科の授業を週35コマ

担当すると共に、学級担任、現地生徒と日本の中学生との交流を行いました。ここでは、年に1回授業研究会を開催するとともに、日々の活動において同僚教員と情報共有を行いました。授業研究会においては、現地教員及びパプアニューギニアで活動する日本人教員が集まり、お互いの授業を観察し合い授業改善の方法を議論しました。そこでは、生徒が考えることができる授業を目指し、現地教員の強みである現地語と英語の使い分けや、日本人教員の強みである教材に関する知見を共有しました。また日々の活動では、理科の実験方法や授業の構成、数学のカリキュラム開発、コンピュータを用いた成績処理の方法など、日常の活動で直面する課題について共に改善策を検討しました。

一方、このような協働的实践は赴任当初から行っていたことではありませんでした。当時の記録を振り返ると、「試験前に街中をフラフラしたりサッカーをしたりしている生徒が多く、勉強したいという熱意が伝わってこない」や「パプアニューギニアの国民を育てるには、パプアニューギニアの教員が教育を行うべきである」など、赴任当初は自分の価値観で物事を捉え、パプアニューギニアの文化との間に壁を作っていたことが伺えます。このような状況が転換したのは、担任を受け持っていた生徒が、学校批判を行ったことにより退学処分になってしまった時のことでした。当時の記録には、「生徒を切り捨てることは簡単だが、そうならないように自分自身が勉強を続ける必要がある。」とあり、生徒を守ることができなかった無力さを痛感し、学び続けなければいけないと感じるようになったことが伺えます。そこでは、パプアニューギニアの文化をより深く知る必要があると感じ、同僚教員や生徒から学ぶことにしました。その際、これまでのように自分の価値観で判断するのではなく、状況の背後を考えるようにしました。パプアニューギニアから帰国後進学した大学院では、ザンビアで2年間教員として数学や理科を教えながら、修士号を取得するプログラムに参加しました。そ

こでは「ザンビア中等教育における物理との関連を意識した関数授業に関する研究—文脈依存性に着目して—」という研究テーマのもと、現地の高校において10年生から12年生(高校1年生から高校3年生)の数学と物理の授業や年間指導計画の作成、科学クラブの指導を行いました。また現地教員を対象とした授業研究のワークショップの開催や、現地生徒の学力調査も行いました。

ここでは協働的な研究・実践として、物理との関連を意識した関数授業の開発を行いました。日々の活動においては同僚教員と理科と数学の関連性について議論し、年2回メールベースのゼミでは大学教員及びゼミ生と考えを共有し、年に1度ザンビア大学・JICA ザンビア事務所と共催のワークショップを開催しザンビア教育関係者と意見交換を実施しました。これら協働を通して、出題の文脈は理科と数学で異なるが数値と解法は同一の問題を用いて、文脈の違いによって生徒が異なった解答を示す要因を明らかにするとともに、物理との関連を意識した数学授業を実施しました。さらに、その後進学した博士課程後期では、ザンビアを事例として理科と数学を関連付けるカリキュラム構成原理を、カリキュラム開発において考慮すべき3つの視点である社会的側面・学問的側面・子どもの側面から導出しました。これらの経験を通して、教育の質的向上には、理論と実践を融合する必要があることを実感しました。

これまでの経験を振り返ると、パプアニューギニアでは教室レベルにおける協働的实践を、ザンビアでは研究の視点が加わり、国際協力機構(JICA)では国レベルでの協働的实践を行ってきました。そこでは、ネットワークを拡大することにより、より効果的に「教育の質的向上」に取り組むことができたといえます。これまでの経験から培った姿勢や知見を活かし、教員・学生・スタッフの皆様と世界的な協働的实践を行いたいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。



山岸 千尋 やまぎし ちひろ

初めまして。今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学しました山岸千尋です。3月までは京都女子大学の文学部国文学科に在籍し、漢文を専攻してい

ました。国語や文学作品とともに教職に関心があったので、大学では中・高の国語の免許と小学校の免許を両方取得しました。現在は小学校教諭を志望しています。

私が小学校教諭を志したきっかけは中学時代に遡ります。

私は幼い頃から引っ込み思案で一人では何もできない子どもでした。勉強や運動もそれほどできたわけでもなく友達も少なかったので周りの子と比べては落ち込んでいました。そんな状況から私を救い出してくれたのは中学時代の国語の先生でした。先生は私の話を親身になって聞いて下さり、私の心に響く言葉を投げかけて下さいました。先生はいつも明るく生徒を褒めることがとても上手だったので私も自分に自信を持つことができました。このような経験から私は誰から言われるわけではなく自然と教員になろうと考えていました。

中学時代の経験なのに、なぜ小学校教諭を目指すことになったのかと思う人もいるかと思いますが、それは現在私自身がモットーにしている「言葉の力」に関係します。言葉は人を傷つけることもできれば人を喜ばせることもできる不思議なものです。人を笑顔にさせたり人に自信を与えたりする言葉を使える人は自分も幸せになれる人だと思えます。「今の子どもたちには幼い頃（小学生の時）から言葉の力、大切さを知って皆が幸せに成長して欲しい。私もその手助けをしたい。」と思ったことが本当の始まりだったのかもしれない。

教育実習は母校である小学校に2週間、高等学校に3週間行かせていただきましたが、その中でも授業についていけず悩んでいる子や人間関係がうまくいかない子など様々な子どもに出会いました。そして、（散々、言葉の力だとか言葉を大切にするとといったことを述べているにも関わらず）私自身自分の言葉で伝えることの難しさも痛感しました。もっと多くの実践を積んで、国語だけでなく他の教科でも言葉の力、大切さを感じられるような指導をしていきたいとも思いました。

4月からは、明新小学校でインターンシップをさせていただくことになります。明新小学校は今年からインターンシップの拠点校として追加された学校です。インターンシップでは、先生方が子どもたちに対してどのような言葉がけをして授業実践を行っているのか、それに伴う子どもたちの行動に注目して学んでいけたらいいなと思っています。

至らない点が多く、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが先生方と協力しながら元気に学校生活を送ろうと思います。



森本 希美 もりもと のぞみ

はじめまして。教職大学院教職専門性開発コースに入学した森本希美です。福井県出身で、昨年度まで京都産業大学経営学部在籍していました。高校一種地理歴史の免許を取得しまし

た。大学では、経営学と教職専門という2つの観点から勉強しました。経営学では、非営利団体が世界の問題について解決する糸口をみつけ努力し続けていることや、企業がどのように発展していったかなどを勉強することができたおかげで、さまざまな時代背景で教科書に載っていない企業の歴史と世界の動きが重なってくるのがわかり、とても充実した学びを深めることができました。

私は、高校から大学卒業までの7年間陸上競技のやり投げという種目をしていました。小学校の頃に陸上記録会でやりを投げている高校生をみて、やり投げをやりたいと思ったことがきっかけでした。高校の頃は、競技をすることに精一杯になってしまい競技のことだけを考えてしまっていたのですが、大

学進学時に地元を離れたおかげで支えてくれる方々・仲間への感謝や礼儀・心技体の大切さなどたくさんのお話を学ぶことができました。幸せな競技生活ばかりではなく、苦しい時間もありましたが私にとってかけがえのない大切な時間です。

この競技生活が大きかったことから、大学当初はこの競技に出会うきっかけを作ってくれた小学校の教師になりたい気持ちもありましたが、高校で部活動の指導をしたいと思う気持ちが強かったため、好きな教科であった地歴の教師になりたいと思い、高校免許だけをとろうと思っていました。しかし、大学の教職の授業を経て、教育実習に行かせていただいたときに、一方的ではなくコミュニケーションがある授業づくりを目標に取り組みしましたが、二週間という短い期間で生徒たちのことを理解し授業づくりをすることはとても難しいものでした。そして、進路についてこのままで良いのか考えたところ、自分は陸上競技や地歴の楽しさという二つの道ではなく、学校生活がきっかけにより多くの道が広がることを教えてもらえた小学校で教師をしたいと思うようになりました。なので、学校に行ったおかげで多くの道

が広げられるきっかけをつくり、いろんなことを知っていただける学校が楽しいと思ってもらえる教師になりたいと思います。

4月からは、中藤小学校にインターンシップに行かせていただきます。初めての小学校で期待と不安

もありますが、現場の先生方から多くのことを吸収して、子どもたちと共に成長していきたいと思いません。



浅島 眞言 あさじま まこと

はじめまして。今春より、教職大学院の教職専門性開発コースの一員として学ぶことになりました。浅島眞言です。出身は京都府で、昨年度までは滋賀大学教育学部初等体育コースに在籍していました。免許は、小学校1種と中学校保健体育科1種を取得しております。これから、2年間どうぞよろしくお願ひ致します。

学生時代を振り返ると、昨年度半年間、週3回の小学校の特別支援学級の支援者をしたことが強く印象に残っています。これは、文部科学省指定の「学校体育におけるインクルーシブ教育プログラムの開発」という事業の一環で実践しました。特別支援教育を知りたいと考えていた際にお話を頂き、自分の専門である体育授業を通して特別支援教育を考えることができ、本当に貴重な経験ができたと感じています。学生ながら、職員会議に何度も参加し、授業をどう展開するか、指導案はどのように立てるか、評価をどうするかなど、先生方と夜までお話ししていたことが懐かしいです。さて、本題です。共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）（中央教育審議会初等中

等教育分科会 平成24年7月23日）において、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。」と報告されています。私が関わった支援を要する児童は、単元前半よく、体育館を飛び出し、学習ができないことが多々ありました。根気強く児童に、どうしたらできそう？できない？と寄り添うことで、何をしたいかわからないから嫌だという声をやっと拾うことができました。その子にとっての、教育的ニーズとは、授業の見通しを持たせることでした。その話を聞いた次の授業から、今日の体育はこれをしてこれをして、ここでここに移動してと細かく説明すると、授業に溶け込むことができましたと感じています。

私は、支援学級に属する児童だけでなく、どの児童もその子にとって必要な教育的なニーズがあると考えています。児童が見せるヘルプサインを見逃さずに、これから子どもたちに関わっていけたらと考えています。まだまだ未熟な私ですが、これから2年間ご指導よろしくお願ひします。



藤田 彩恵 ふじた さえ

はじめまして。教職専門性開発コースに入学した藤田彩恵です。昨年度までは、福井大学の障害児教育コースに所属していました。私が、特別支援教育について学びたいと考えたきっかけは、重複障害のある子どもとの係わりでした。高校生のと

きにボランティアとして特別支援学校へ伺った際、その女の子と出会いました。女の子は、車いすの背もたれを傾げることで無理のない姿勢を保っていたり、胃に直接栄養を送るため穴を開けていたりして、私がそれまでに出会った人の中で最も重度の障害のある人といえました。その子との係わりを通し、目に見える障害は大きくても、接して感じる隔たりはとても小さいことを実感しました。女の子の手を取り、共

にボールを使ってボーリングのピンを倒すことで、その子の表情が少し柔らかくなる。その表情を観て私は嬉しくなり、また何か係わりを持つととする。そのようなコミュニケーションが生まれており、私は心からその時間を楽しみました。

この出会いをきっかけとして、障害のある人と係わるボランティアに積極的に参加をするようになり、特別支援教育に携わりたいという思いを抱くようになりました。

大学生活の中で、重複障害のある子どもさんと係わることは少なかったように思います。しかし、ボランティア活動や教育実習等を通して特別支援教育の対象である多様な児童生徒の姿に出会うことができました。知的障害のある高校生と窯業に取り組んだり、小学校特別支援学級において生活単元学習の授業をさせて頂いたりすることがありました。それら

の経験は、私に「人とのやりとりの中で学ぶ」ことの大切さを教えてくれたように思います。一方的に何かを教えるのではなく、子どもたちの反応から係わりについて学ばせて頂くことが本当に多かったです。

私は、将来教員として障害のある児童生徒に対し適切な支援を行うことができる力を培いたいと考えています。このような力は、「目の前の子どもとのやりとりから学び、その子に対する認識や支援を変化させ続けること」を丁寧に継続した後に得られるものではないかと考えています。教職専門性開発コースでは、長期インターンシップが必修となっており、大学院でのカンファレンスの場が保障されています。そのような環境の中で、丁寧な学び方をスタートさせ、教員としての力量を培っていきたいと考えています。これからどうぞ、よろしく願いいたします。



竹内 達郎 たけうち たつろう

皆様はじめまして、富山大学人間発達科学部人間環境システム学科からきました竹内達郎と申します。大学時代は理科を中心に勉強（特に物理分野）を

し、現在中高理科一種の免許を取得しています。大学時代は、小学生の児童や幼稚園児を対象にした実験教室のボランティア活動を行っていました。難しい専門用語をわかりやすく言い換えることやイラストなどを使いわかりやすく説明することで、子どもの興味を引くことができることにやりがいを感じ、小学校教員にもなりたいと思うようになりました。大学院では、小学校免許取得プログラムを使い小学校の免許を取得したいと考えています。また、教育実習では、2回の中学校実習を経験しました。実習期間は3週間ずつありましたが、授業時間以外の空き時間のほとんどを理科実験の準備に当てていました。そのため、自習期間中に子どもたちと接する時間がとても少なく、生徒の実態について考える機会がほとんど無く、大学時代に残念に思いました。

今回、この大学院の長期インターンを通して「日常生活と学習内容との関連付け」について考えていき

たいと思っています。子どもたちが学習を進めていく上で、子どもの興味を引くことは学習意欲の向上に大きく結びついてくるものであると考えています。さらに、子どもたちの日常生活と結びついていることにより、内容の定着度も上がってくるものと考えています。長期インターンシップの大きな特徴の一つに、長期的に子どもと関わることが出来る事が挙げられます。子どもたちと関わる中で、子どもたちが日頃どのようなことに興味を持ち、どのようなことを学んでいるのかしっかりとこの目で見て、考えていきたいと思っています。インターン先は、福井大学附属義務教育学校の前期課程に決まりました。一日一日を子どもたちとしっかり関わりながら過ごし、そこで得たものを授業に反映することができるようにしていきたいと考えています。自分の専門は理科ですが、理科以外の教科に関しても日常との関連付けを行いことができる機会があると考えているので、どの教科に関してもしっかりと学習していきたいと考えています。3年間という長い期間ですが、少しでも学ぶことが多い日々を過ごしていきたいと思っています。今後とも宜しく願いいたします。



日野 晶 ひの あき

1994年11月22日生まれ。東京都国立市育ち。2007年桐朋女子中学校・高等学校に入学。バスケット部に入部し、充実した生活を送りました。

行事に活発的なこの学校でクラス文化祭委員、ク

ラス音楽祭委員、体育祭実行委員を毎年勤め、人をまとめる楽しさを見出しました。そこで地域ボランティア活動にも参加し、小学生向けに行事の企画・運営に携わり、キャンプなどの課外活動にも参加し、企画・運営の楽しさを感じました。

2014年同校卒業し、同年に明星大学造形芸術学部造形芸術学科入学しました。ビジュアルデザインと陶芸を専攻し、中学校・高等学校教諭一種(美術)・高等学校教諭一種(工芸)を取得し、バスケットボールサークルに所属していました。アルバイトやボランティア等の活動では薬局、レストランでの接客業、大学2年にインターンシップで行った中高一貫校でのバスケットボール部の外部指導コーチ、また小学校でメンタルフレンドといったクラスで勉強に遅れてしまう児童のフォローや、水泳教室の指導、特別支援学校でのスキー教室への同行や文化祭のお手伝いなど、大学の生活を様々な活動へ活かせるよう励んでおりました。

一度参加したラウンドテーブルで刺激を受けたことで学校拠点方式の魅力に強く惹かれ、2017年卒業後、同春に福井大学教職大学院教育学研究科教職専門性開発コースに入学し、現在小学校教員を目指して小学校免許プログラムをとっています。

趣味はスノーボードや、バスケットボールといった体を動かすことです。また旅行も好きで海外、日本国内問わず多くの国や地域で様々な世界を感じ、見ることで学びにつながるるとともに自分の価値観を覆す世界観、文化、景色から様々な感動を受けました。

今まで様々な人と触れ合ったり、自分との差異を感じたり、わかちあったりといった経験はたくさんありました。しかし、無駄だと感じることはなく、自分の挑戦や体験は何事も学びにつながるのだと思います。『あの時、あのことが体験できてよかった』『これはこういうことか』とひらめきにつながることで、学んでよかったと思う気持ちは必ず後につくものだと考えます。あの時挑戦していなかったらこの学んでよかったという気持ちはついてこなかったと考えると、今もここで挑戦しないと得るはずの学びも得られない、と日々感じます。さまざまな体験もどう吸収するかは自分次第であり、これからの3年間の大学院での生活でも挑戦し続けてスポンジのように吸収し、学びにつなげていくことを大切にしたいです。

よろしくお願い致します。



新谷 輝 あらたに あきら

4月から新M1になりました、新谷輝(あらたにあきら)です。

私は、大学在学中に「低学年児童期のかぐく」と題した理科教育の研究を行っ

てきました。実際に指導案や教材を作成し、幼稚園や小学校に訪問し、実践を行ってきました。しかし、実際に教育実習以外に長期間にわたって、子どもたちや同僚の先生方と関わりながら、授業やクラスを作ったり、保護者の方や地域の方と関わったりした経験がありませんでした。そのため、本学の教職大学院で経験できる、長期インターンシップや現場の先生

方や学生と交流できるカンファレンスの場は楽しみにしていました。

長期インターンシップでは、4月から福井大学附属小学校にお世話になっています。4月10日には、教員の立場で、初めて入学式の準備を経験させていただきました。このように、インターンシップが始まって間もない中ですが、職員会議での校長先生のご挨拶の中で心に残ったお話がありました。

「義務教育学校の前期課程の先生は、小学校のように6年間が終わるまでが自分達の責任というわけではありません。義務教育学校の前期課程の先生なら、後期課程に繋がるための教育を考えなくてはならないし、9年間を通して見たときに、今行っている

授業は9年間のうちのその時期に適しているかどうかを常に考える必要があります。」

このお話をお聞きしたとき、私はインターン生でありながら、教員の1人として、現場の先生方から授業の作り方やクラス作りなど、現場での教員の在り方を学ばなければならないと、改めて感じました。このように、インターン先で過ごすことが多かった4月上旬でしたが、先日、大学院でもオリエンテーションがありました。新しい生活が始まるということで、緊張もしながら楽しみでもありました。

オリエンテーション終わりの分科会の中では、自己紹介の時間があつたのですが、大学の先生のお話がとても印象に残りました。私の出身地のことや私

が大学で学んできたことなど、私が話す内容の1つ1つのことに対し、丁寧に答えてくださるだけでなく、「〇〇は知ってる？」や「△△があるんだけど、その歴史は…」など、知らないことも教えてくださりました。教員には、自分の専門分野に精通しているだけでなく、いろいろな分野にアンテナを張っておくことも必要であると、改めて考えさせられました。

このように、学ぶことが多かった4月上旬ですが、大学院での2年間の生活を通して、大学の先生方や学生の皆さん、現職の先生方からより多くのことを吸収し、学びたいと思います。

よろしく願いいたします。



松木 巧 まつき たくみ

はじめまして！今年度、教職専門性開発コースに入学しました松木巧です。福井大学出身で、教育地域科学部学校教育課程臨床教育科学コースに所属していました。

私は小学生時代、学級内で起きたいじめを止められなかったことが忘れられず、そういった問題で学校での居づらさを感じている子どもの力になりたいと考え、教師を志しました。入学当初は、小学校と得意だった国語の教員免許を取得しようと考えていたのですが、大学で教育について学んでいくうちに、いじめや不登校に関わる子どもたちは障害を抱えている場合があるということを知りました。これをきっかけに特別支援教育についても興味を持ち始め、学びを深めてきました。

大学3・4年次には、小学校、中学校、特別支援学校と3度の教育実習を行いました。それらを通して、私が最も印象的に感じたのは「子ども理解があつてはじめて授業が成り立つ」ということです。子ども1人ひとりの興味や性格、学級の持っている雰囲気を読み取り、それらを考慮した上で授業を組み立てることが、楽しく学ぶために重要なことだと強く感じました。特に、特別支援学校では子どもたち1人ひと

りの得意なことや、苦手なことを丁寧に見取り、時間をかけて授業をつくっていきました。関わり当初は何を求められているのか理解することに苦しみましたが、相手の立場に立って考え続けていくことで、次第にコミュニケーションをとることができるようになりました。このようにして子どもを理解出来たときの充実感に教師としてのやりがいを感じ、より子ども理解に努めようと考えました。

卒業研究では、相談室登校をしている生徒と長期間を通して関わり、進路決定に至るまでの周囲の効果的な支援についての研究をしました。ここでは、得意な活動や好きな活動に共に取り組むことが自信を持たせることに有効であることや、共感的理解を積み重ねることが信頼関係を築くために効果的であるということが分かりました。

インターンシップでは、小学校の特別支援学級に入らせていただきます。これまでの経験を生かして、1人ひとりの子どもの理解に努めつつ、他学級の児童との交流についても考えていこうと思います。そして、お互いのよいところを認め、尊重し合えるような考え方を育むために、教師としてどうあるべきかについても考えていきたいと思っています。至らないところもありますが、これからよろしく願いします！



渡辺 頑太 わたなべ げんた

私は福井県で育ち、中学・高校を経て滋賀にある大学で四年間学んだ。大学では主に教育学部ではなく理工学部に属し、応用数理解析を中心

に学んでいた。

そんな私が教職を最初に意識したのは中学の頃だった。教科の先生たちのわかりやすい授業や担任の熱い指導にひかれ自分もこんな職に就きたいと考えていた。大学4回生の時、教員免許取得のため母校の中学校へ教育実習に行かせていただいた。実習では思い通りにいかない授業や生徒への指導に考える日々が続いていた。しかし時間が経つにつれて生徒たちとの接し方や思い通りの授業展開に近づくことが出来た。そして実習最終日に生徒たちに感謝の言葉をもらった時にとってもやりがいのある仕事であると感じた。そこで教師という道を進もうと決意した。

しかし来年からすぐに教壇に立ち、子供たちに適切な指導や授業を展開することが出来るのだろうか。そのような不安が私にはあった。そんな時、実践とその振り返りが出来るこの福井大学教職大学院の存在を知り、入学して今に至る。

私は他の人の意見や言葉を否定せず、まずは受け入れることを大事にしている。自分の考えを相手に

押し付けるのではなく、違う意見があること認め話し合うことでより良い意見を探していくことが出来ると思う。このことを生かし、実際の教育現場でも子供や他の先生と受け入れることを大切にし、話し合うことをしていきたいとおもう。

現在は福井市の至民中学校で週に3回程度インターンとして通わせていただいている。至民中学校は教科センター方式や異学年型クラスターを導入しているとても特色のある中学校だ。校舎も普通の学校と比べつくりが異なっている。生徒たちは明るく素直な生徒が多い印象を受けた。そのような学校で私は教師の基盤を身に付けていけることをとても楽しみにしている。

教職大学院ではこれからの時代に求められる授業の展開方法やカリキュラムについて考えていきたい。私が受けた教育と今の子供たちが受けている教育が違うように、次世代の子供たちが受ける教育というのも今とは違うと思われる。子供たちに身に付けた力はどの様なものであるかを考えていくことで、子供たちが為になる授業というのが出来るのではないかと私は考える。

また、生徒の生活面での指導方法等についても深めていきたいと考えている。実習で起きた指導をもとに、本当に正しい指導かどうかを現場で働いている先生方と一緒に話していきたい。



竹本 瑞季 たけもと みずき

教職専門性開発コース1年の竹本瑞季です。出身は石川県です。京都橘大学で小学校、幼稚園を専攻していました。大学ではボランティアで小学校の2年生、教育実習で6年生のクラスに入って子どもたちと関わっていました。ボランティアや実習では、子どもたちの興味は様々なので教師が幅広く興味を持つこと、子どもたちが何を言いたいのかをちゃんと聞いて真摯に言葉を返すことが大切だと感じました。また、子どもたちに信頼されるためには「楽しさ」も「厳しさ」も両方大切だと思いますが、私はまだまだどちらも足りていな

いなと感じることが多くありました。教職大学院のインターンシップやカンファレンスで試したり、考えたり、いろいろな人の意見を聞いたり、相談したりして力をつけていきたいです。

卒業論文では小学校の英語教育と英語の絵本の関わりについて書きました。英語教育についての様々な文献を読んだり、実際に自分で英語の絵本を作ってみたりしました。小学校では様々な教材が用いられていると思うので、その様子にも注目してみたいです。

教職大学院では中藤小学校でインターンシップを行うことになりました。3年生のクラスに入っています。中藤小学校は最近新しく建てられた学校で生

徒の人数も 800 人以上いる大きな学校です。私がこれまで行った学校は生徒数が少ない学校ばかりだったので、かなり違いがあると感じました。特に中藤小学校ならではだと思ったのは学校全体での取り組みが多いところ。朝の挨拶や「いただきます」の挨拶を放送の呼びかけで同時に行ったり、掃除は「無言」で隅々まで行くことを徹底していたりと先生たちが学校全体で良くしていこうと働きかけていることが子どもたちにも伝わっているように感じました。私が入っている 3 年 3 組の担任の先生は「褒める」ことを大切にしている先生です。教室の雰囲気も穏や

かな感じがします。授業中私が注意しても先生の話聞いていなかった子どもたちが、先生の何気ない一言でちゃんとするようになったことがありました。どのような話し方をすれば子どもたちにより届くのか学んでいきたいです。まだ、授業についてはそれほど見られていませんが、私自身苦手な教科があったので、苦手な授業にも少し興味を持って取り組んでみるようにするにはどんなやり方があるのかということについても学んでいけたらと思っています。分からないことや悩んだことを相談することをまずは大切にしていきたいです。

平成28年度教員免許状更新講習(必修領域)実施報告

協働により自己の実践を省察し、さらなる向上を目指す更新講習へ

福井大学教職大学院 准教授 小杉 真一郎

1. はじめに

平成 21 年度に教員免許更新講習制度がスタートして、今年度で 8 年目を迎えた。

福井大学教職大学院が企画・実施している講習では、スタート当初から「新しい時代を拓く教師の実践コミュニティ」のテーマのもと、教師が高度専門職として学び合い、探究し合う活動を取り入れたスタイルをとっている。教師が大学教員から一方的に教えられて学ぶ知識供給型ではなく、知識基盤社会において目指す学力そのものに焦点を当て、「協働の活動を通して新たな知識を生み出す活動をメインに据える」といった本学教職大学院で行われている学びのスタイルを導入した小グループでの協議を中心とする省察型の講習を行っている。グループでの活動の間にはミニ講義という形で、活動の意味づけや背景となる最新の教育事情、教育改革の状況なども入れ込みながら、グループセッションに活かす濃厚な講習構成となっている。そして、そうした構成自体が、「—新しい時代をひらく教師の実践コミュニティ—実践の経験と知恵を共有するために語り聴き・読み綴る—」という本学講習のキーコンセプトとなっている。このような教師自身が実践・省察を通して探究し、コミュニケーションを行いながら協働の実践研究を進めていく活動は、学びの専門職としての教師の力量形成のためにも、専門職の学び合うコミュニ

ティとしての学校づくりにも重要な活動であり、「学び続ける教師像」の具現化にもつながるものである。そしてそれは、まさに『新学習指導要領』が新しい質の高い学びの柱として据えている「主体的・対話的で深い学び」の視点であるアクティブ・ラーニングをそのまま講習に取り込んでいるといえる。

2. 本年度の変更・改善点

本学の講習では、昨年度まで必修領域「教育実践と教育改革Ⅰ」を 1 2 時間、並びに選択領域「教育実践と教育改革Ⅱ」を 6 時間として実施してきた。

ところが、平成 26 年 10 月 2 日付けの文部科学省通知『免許状更新講習における選択必修領域の導入について』により、これまで実施されてきた必修領域の内容の一部を「選択必修領域」として移行し、必修領域 6 時間、選択必修領域 6 時間とに分けることとなった。これは、改正前の必修領域の内容が広範囲にわたっていたことと全受講者が共通して受講するため、受講者の希望やニーズに合致しづらいことなどの指摘を踏まえ、内容を精選したためである。また、これに併せて、現代的な教育課題に対応するため、学校種や免許種等に応じた講習が適時に提供される必要があることから、6 時間の選択必修領域が新たに設置されたのである。

これらの状況変化に対応するため、本学では学部の教員免許状更新講習運営委員会にワーキングチームを立ち上げ、「選択必修講習の導入に伴う必修領域関連講習の実施方法等」について検討し、以下の方針を決定した。

必修領域においては、これまでも大切にしてきた教員の学びの専門職としての教師の力量形成、専門職の学び合うコミュニティとしての学校づくりに重要な「省察的実践」を重視することを基軸に置き、これまでの内容をより受講者にとっても魅力があり、実践的な内容に改善していくこととした。

特に必修領域の「教育実践と教育改革Ⅰ」は、「アクティブに『これからの教育』を学ぶ」へテーマを変更し、これからの知識基盤型社会において子どもたちが高い志や意欲をもち未来を切り拓いていく力を育むため、主体的・協働的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」など学びの質や深まりを重視した学習や、教師自身が新たな課題に「チーム学校」として組織的・協働的に取り組む学校づくりなど、教育改革の最新情報や研究知見を聴いたり、具体的な実践記録を読んだり紹介し合うなどの内容とした。これらを通し、教師が今後の新たな教育の在り方について能動的に学び直し理解を深め、明日の実践に向けた展望を拓いていくことができることをねらいとした。

新設の選択必修領域（6時間）「教育実践と教育改革Ⅱ」では、従来のような1コースではなく「A：アクティブに『授業づくり』を学ぶ」「B：アクティブに『気掛かりな子どもの支援』を学ぶ」「C：アクティブに『チーム学校』を学ぶ」の3コースを設定し、個々の関心によって選択できるよう新たな構成にした。なお、それぞれのコースでの講義や探求学習とともに、3つのコースの受講者が異なる実践をクロスで紹介し合う活動も取り入れ、自己の検討をより多角的に省察し、自己の実践への展望を開くことにつながるような配慮を行った。

また、選択領域の「教育実践と教育改革Ⅲ」については、従来通り、受講者自身の教育実践の省察を核とし、受講者がこれまでの教育実践の中で大切にしてきたこと、試行錯誤しながら取り組んできたこと、その中で考え練り上げてきたことなどを振り返り、他の受講者と専門職として実践を語り合いながら、意見交流を通して、検討内容を多角的に省察しこれからの実践の在り方を能動的に考え、実践記録としてまとめ上げていく大切な時間となるような構成にしている。

なお、「教育実践と教育改革Ⅰ」「教育実践と教育改革Ⅱ」「教育実践と教育改革Ⅲ」は、それぞれ必修講習、選択必修講習、選択講習の3区分となっている

が、それぞれに関連し深まるような構成にもなっており、本来であれば3日間の連続が最も望ましい受講の形態としている。ただし、個々の講習を独立して受講できるようにも配慮し、柔軟な対応ができるように構成した。

これまで本学での必修講習を受講した教員の多くが、本講習での協働の省察的な学びを体験し、その良さをそれぞれの学校や地域で活かしているという声をよく聞く。その一方で、年々多忙化する学校現場では、3日間しっかり時間をかけて受講する本学の必修講習を敬遠し、自由に受講時間を融通できる通信制の講習を選択する教員が少なくないのも事実である。今回の講習区分の改正は、減少傾向にある本学の教員免許更新講習受講者数を増員に転換させ、かつ学校現場の教育状況の改善にもつながるものと考えた。また、これらの講習は福井県教育研究所主催の「新任教頭研修講座」と連携するなど、大学と教育委員会の連携・協力体制の下に実施されている。

本学では、これらの他にも、選択領域として（あるいは本年度は選択必修領域も加えて）本人の専門や課題意識に応じて、教科指導や生徒指導その他教育の充実に関する事項について、受講者のニーズに配慮しながら、創意工夫に富んだ講習として積極的に開講してきている。

3. 本年度の講習の実施概況

前述のように、本年度から新たに選択必修講習を加えるなど、プログラムを一部変更したが、必修講習（「教育実践と教育改革Ⅰ」）、新設の選択必修講習（「教育実践と教育改革Ⅱ」）、選択講習（「教育実践と教育改革Ⅲ」）のいずれも、「よい」「だいたいよい」の評価を合わせると、全ての項目で90%を大きく上回っており、受講者の満足度は例年通り極めて高い状態を保つことができた。参加者数も昨年度は最低の人数を更新したが、今年度は239名と昨年度の195名を上回り、V字回復の兆しを見せた。後述の参加者のアンケートの結果からも、本講習での受講に対してその多くが期待を持って参加しており、グループでの協働の活動でも、能動的な受講姿勢で、校種や年齢、地域等の異なる同僚と実践を語り、傾聴し、その意義や価値を高く評価し、実際に活発な話し合いがなされていた。グループ協議では、ファシリテーターとして多くの新任教頭先生方が、新任教頭研修を兼ねて参画頂いているが、そのサポートが大きな力となっており、この場をお借りして改めて感謝の意を述べさせていただきたい。文末に掲載したものは、今年度の講習受講者の事後アンケートに記述されたメッセージの抜粋である。これらの記述

からも本講習のねらいや目的が十分達成されていたのではないかと推察する。

4. 福井県との協働による次年度以降の新たな教員免許更新講習に向けて

中教審の分科会では、大学と県などの地方自治体が、免許状更新講習とこれまでの教員研修を一体化して、体系化し、現職教員の資質の向上をねらうことを提言している。そこで、来年度から福井県と本学教職大学院は、県の経年研修を含めた年代別研修と国

の免許状更新講習を組み合わせる一体型の講習として実施し、県と大学が協働して現職教員の資質向上に取り組むことになった。

詳細な計画等については、現在、福井県と福井大学教職大学院において検討中であるが、これまで本学教職大学院で実施してきた質の高い教師教育、力量アップの研修を、福井県の全ての教員が免許状更新の10年のたびごとに受講できるよう、プランを考えているところである。福井県の先生方にはご期待いただきたい。

【受講者の声】

- 最初は、課題のレポートに何を書くべきか大変悩んだが、その悩んだ分だけ自身の実践をたくさん振り返ることができた。多くの先生方に様々なご意見を頂けたことも、貴重な経験となった。このような話し合いは生徒同士でやらせてみても面白いと思った。
- 今までの教員生活を振り返ることができ良い機会となった。毎日忙しさに流される日々なので、時々立ち止まって過去を振り返り、現在やこれからのことを考え、前進していくことの大切さを改めて学ばせていただいた。スタッフの方々にも丁寧に対応していただき感謝している。
- 若い先生のフレッシュな見方、ベテランの先生方のこれまでの経験を踏まえた深い洞察を聴くことができ、様々な視点で考えることができた。また、自分の考えを決められた時間にまとめ、書いたり話したりするのも、とてもよい経験になった。
- 学習指導要領や国内外の教育事情を含め、最新の情報や専門的な内容の講義も、コンパクトで分かりやすく、とても充実していた。たくさんの方々との話し合いを通して、様々な角度から自分の実践を見つめ直すことができたことも大きな収穫だった。ぜひ、日々の実践に活かしていきたい。

【ファシリテーター（新任教頭）の声】

- ファシリテーターとして、話しやすい雰囲気づくり、何かを伝えるより寄り添うことの大切さを学んだ。退職が近づく中、教育現場で実践できる時間は少ないが、「生涯勉強」だと思った。現場でも多くの先生方と話し合い、コミュニケーションをとり、寄り添える管理職になりたい。
- 事前の研修で「傾聴」の研修を受けたことが大変参考になった。ファシリテーターとして、場を作り、傾聴すること、共感し受け止めることが大事であるということを実感できた。自校の会議や研究会等においても、一人一人の話を傾聴し、共感する姿勢で臨み、職員とのさらなる関係を築いていきたい。
- 参加者が主体的で協働的な話し合いをできるようにするためには経験と技術が必要だと感じた。今日学んだことは、必ず今後生きると思う。
- 教頭としての発言は校内の職員に対しての重みはあるが、一方で「やらされ感」も強くなり意欲が逆に高まらないこともある。ファシリテーターとしてのスキルを活かし、自分の発言は控えながら、職員間で話し合いや協働が高まるようにしていきたい。
- 異校種、異年齢のグループの中で、一つの課題について話し合うことはとても学びが深まる。また、今まで自分が持っていなかった視点を実践の中に取り入れていくことができると感じた。こうした方法をぜひ校内研修の中に取り入れていきたいと思った。多角的な視点で、実践の文脈を読み取り、解釈をする課程で、確かなものを見つけていく探究的な学びを教師集団の中で行っていきたい。

開講式

桜が満開に咲き誇る2017年4月8日（土）の午後、平成29年度の開講式が行われました。今年度は教職専門性開発コースに15名、ミドルリーダー養成コースに7名、学校改革マネジメントコースに17名の計39名が入学しました。また、新たに5名のスタッフが加わりました。

開講式では、石井パークマン麻子研究科長、柳澤昌一専攻長から挨拶があり、歓迎と激励の言葉が述べられました。話に熱心に耳を傾ける1年目の皆さんの様子から、緊張の中にも、これからの協働探究への期待や新たなチャレンジへの決意が見てとれるようでした。

その後、スタッフから年間計画や4月の合同カンファレンス、拠点校や連携校の担当教員、履修手続き等の説明があり、記念撮影が行われました。また学校別分科会も行われ、1年目から3年目までのメンバーおよびスタッフが一緒に今年度の展望や連携について話し合いました。そこでは1年目の皆さんも打ち解けた様子で語り聴き合っておられ、福井大学教職大学院らしいスタートになったように思います。

1年目の皆さん、ご入学本当におめでとうございます。これからどうぞよろしく願いいたします。
(半原芳子)



平成29年度 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻/スタッフ専門分野一覧	
青木美恵	授業改革マネジメント/附属幼稚園
天方和也	授業改革マネジメント/附属特別支援学校
綾城初穂	臨床心理学
新井豊吉	障害児教育
荒木良子	特別支援教育
荒瀬克己	教育行政マネジメント
石井恭子	理科教育・授業改革マネジメント
遠藤貴広	教育方法学
大西将史	発達心理学
風間寛司	数学教育・教師教育学
加藤正弘	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
岸野麻衣	幼児教育
木村優	教育学
倉見昇一	教師教育学
小嵐恵子	コミュニティとしての学校と教師の力量形成・障害児教育
高阪将人	国際理数科教育協力
小島啓市	教育行政マネジメント
小杉真一郎	教育行政マネジメント
小林和雄	理科教育・授業改革マネジメント
笹原未来	特別支援教育
篠原岳司	教育行政学
鈴木寛	教育行政マネジメント
玉木洋	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
寺岡英男	教育方法学
富永良史	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
中川美津恵	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
中島健	授業改革マネジメント
永谷彰啓	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
西川満	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
花井涉	比較・国際教育学
隼瀬悠里	教師教育学
半原芳子	多文化共生
エリザベス・ハートマン	教師教育・数学教育
廣澤愛子	臨床心理学
藤井佑介	教育方法学
松井富美恵	障害児教育・教師教育
松木健一	教育臨床心理学
松田通彦	教育行政マネジメント
三田村彰	教育行政マネジメント
水野幸郎	コミュニティとしての学校と教師の力量形成
森透	教育実践史
柳澤昌一	社会教育学
渡邊淳子	授業改革マネジメント/附属義務教育学校(前期)
王林鋒	英語教育・授業研究

【編集後記】桜の便りが届く季節を迎え、各学校や幼保こども園等では、それぞれに新しい生活が始まっていることでしょう。初めて入園する幼いお子さんから、学生の皆さんはもちろん、そこで働く職員もまた、この季節には期待や不安といった様々な想いがあると思います。この機会を大切な節目と考え、新たなステージに挑戦できる、そんな「はじめの一歩」になると嬉しいです。(中島健)

教職大学院 Newsletter **No.96**

2017.4.14 内報版発行

2017.4.30 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1

dpdtfukui@yahoo.co.jp